

補助資料

4

1

プロジェクト活動成果報告書 (教員)

PB競争時代における地元スーパーの生き残り戦略.....	65
担当教員:石田 宏之	
携帯端末向けアプリ作成.....	69
担当教員:今井 正文	
SOZOショップコラボプロジェクト.....	71
担当教員:川戸 和英	
豊橋エコタウンプロジェクト ～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システムの状況調査～.....	73
担当教員:見目 喜重	
アカウミガメ保護啓発活動.....	75
担当教員:中野 聡	
高校生と学ぶ会計学☆彡.....	76
担当教員:野口 倫央	
トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト.....	78
担当教員:三好 哲也	
We ♡ NONHOI ～のんほいパーク盛り上げ隊～.....	81
担当教員:三輪 多恵子・山口 満	

P B 競争時代における地元スーパーの生き残り戦略

石田プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

安藤 祐輝・21123202、酒井 裕輝・21123112、
井上 晃成・21123207、井上 高彰・21123208、
久米 佑典・21123214、柴田 和樹・21123217
牧野 広季・21123901

2. 協力企業等と調査個所

・ 協力企業等

①サンヨネ本社（三浦本部長よりヒアリング）

②豊橋農協及び高橋農園

・ 調査個所

①コンビニ：セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン、サークルKサンクス

②スーパー；マックスバリュ、イトーヨーカ堂、サンヨネ、クックマート

3. プロジェクトの概要

(1) 調査目的

調査の目的は以下の点を明らかにすることである。

①NB 商品と PB 商品との違い

②NB（ナショナルブランド）商品に比べて PB 商品は、なぜ価格が安いのか

③コンビニは、なぜスーパーより高いのか？

④PB 商品を製造するメーカー及び野菜の P B 商品を生産する農家・農協の対応は

⑤これら PB 商品を供給するロジスティクスシステム

⑥PB 競争時代の地域スーパー（東三河）の生き残り戦略は

大野尚弘「PB 戦略—その構造とダイナミクス—」（2010年2月）

富士通ロジスティクスソリューションチーム・編「中間流通はだれが担うか—小売業・卸売業・メーカー・運輸倉庫業：18社の先進事例—」

②日本経済新聞、日経産業新聞、日経流通新聞等の新聞記事

③ヒアリング及び実態調査（本プロジェクトでは、主として食品・野菜を対象）

・スーパー（マックスバリュ、イトーヨーカ堂、バロー、クックマート、サンヨネ）

・コンビニ（セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン、サークルKサンクス）

・豊橋農協及び高橋農園（それぞれヒアリング）

・サンヨネ本社（店舗調査と三浦本部長よりヒアリング）

(3) 実施結果

① ブランドの定義と PB 競争時代

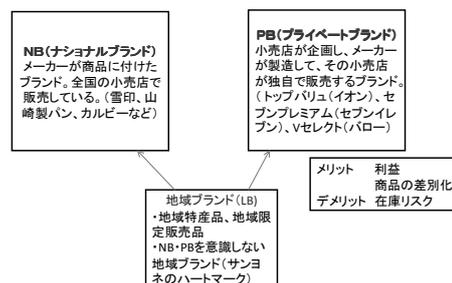
ブランドには、NB(ナショナルブランド)、PB（プライベートブランド）、LB（ローカルブランド）の3種類があり、NBとは、雪印、山崎製パン、カルビーなどの大手メーカーが商品に付けた商品名で全国の小売店で販売されている商品を指す。PBとは、トップバリュ（イオン）、セブンプレミアム（セブンイレブン）、Vセレクト（バロー）などのように小売店が企画し、委託メーカーが製造して、その小売店が独自で販売するブランドを指す。

NB・PB・LBの定義

(2) 調査方法とスケジュール

	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
文献調査	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
ヒアリング及び実態調査	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←	←
報告書作成						中間報告				本報告		報告書作成

① 文献調査：日本経済新聞社・編「PB・格安・高品質競争の最前線」（2009年11月）



地域ブランド（LB）とは、地域特産品、地域限定販売品などや今回調査したサンヨネのハートマークのようなNB・PBを意識しない商品をここでは指す。

PB 競争時代は、長期デフレの影響で、消費者の節約志向が強まり低価格商品のニーズが高まったことから始まった。

低価格化のニーズは、NB 商品の価格低下としては見られず、こう売り商品の価格決定権をもつ小売り側から手がつけられた。それがPB 商品の開発に取組みと低価格商品を提供する戦略である。

大手スーパーが90年代後半から始めたPB戦略は、2000年に入り大手コンビニにも波及し、その後、地域スーパーでもPB開発を手掛けるようになった。

その結果、これまで別市場であったスーパー、コンビニ、生協、100円ショップなどの市場の境界を不鮮明にし、これら業種での競争が激化している状況が、「PB競争時代」といえる。

PBとNBの価格比較と高級PB商品 従来からの低価格のPB商品は、スーパー及びコンビニでは、NB商品と比べて30~50%と安いことが店舗調査によって検証された。しかしながら、昨今では、NB商品より高い価格の高級PB商品が出回ってきている。

スーパー・コンビニの高級PB名

会社名	プライベートブランド	特徴
ファミリーマート	ファミリーマートコレクション(プラチナライン)	素材や製法のグレードを上げた高付加価値商品
サークルKサンクス	PrimeONE	高価格帯のPB
イオン	トップバリュセレクト	素材、産地、製法、昨日にこだわった高品質ブランド
イオン	トップバリュプレミアム	上質な素材と製法、衣料ブランド
セブン&アイ	セブンゴールド	高価格帯のPB

このように、従来のNB価格>PB価格の概念が壊れつつあり、また、NB商品に関してこれまでコンビニ販売価格>スーパー販売価格といった概念も代わりつつあり、NB、PBの差別がつきにくくなっている。店舗調査では、コココーラについては明確な差異が見られた

が、その他の商品では、店舗によっては販売しておらず、NB類似の商品がないなど、NB商品とPB商品の販売戦略が変化していることも判明した。

② PBを生産するメーカーの特徴

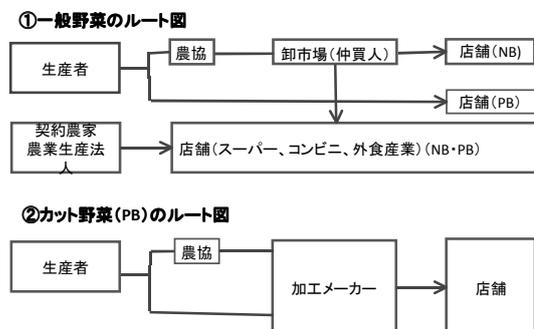
PB商品を生産している企業にはさまざまな規模の企業が委託を受け生産している。大手スーパーの3社（セブンアンドホールディング、イオン及びユニーグループ）の特徴を見ると、セブンとイオンは大手企業との共同開発が盛んであり、それに続くユニーグループのサンクスを見るとこれら2社との差別化をはかり、低価格の独自（プラス one）PB商品をさまざまな規模のメーカーに生産委託している。ただ、その中で、共同開発をしている企業には大手企業が多くみられる。これはサンクスでもそうであった。

共同開発には生産側も販売側も双方に利益があるが、デメリットとして、NB商品と味、質の差をどう解消できるかである。

③ PB商品に対する農家・農協の考え

「産地ブランド」がNB商品だということが判明した。一方、農家が卸市場を通さずにスーパーやコンビニなどに販売する商品がPB商品である。たとえば、大葉、ネギ、しいたけ等についてスーパーでPBマークを付け販売している。また最近では、「カット野菜」がPB商品としてスーパーおよびコンビニで回っている。

野菜に関するNB商品とPB商品の流通ルート図



売り場でPBとするかどうかは、買手のスーパーなどで決定しており、農協ではどちらでもよいと考えている。

市場に頼っていると、中間に仲卸業者が介在するの

で、最終的にどこに販売されるかがよく見えない。また最近では、「いいものを安く販売したい」とのスーパーも増えてきているので、市場に頼らない経路を持つていれば生産農家にいくらかでもメリットがあると考えている。産地ではなく農園の名前の青果物として扱ってもらいそれが浸透していくうちに PB→NB というオリジナル商品になる可能性があることを期待している。また、農家では、従来のNB商品の野菜より比較的安く、そして確かな品質と食の安全を届けたいとの思いでPB商品を導入している。健やかな人や社会、地球環境作りへ社会貢献することを願い、農家とスーパーが共に協力し合い作り上げている商品と考えている。

このような農家と契約するメリットには 1) 安く仕入れられる、2) 農家の顔が見える、出所がはっきりできる、3) 他の店にはないオリジナル商品になるなどがあるが、デメリットとして 1) 良い農家に出会える可能性が低い、2) 一年分を確保しなければならない、3) 高く買い入れてしまうかもしれないなどがあげられる。

④ 縁の下の力持ち・・・「ロジスティクス」

ロジスティクスとは、顧客ニーズに合わせ、必要なときに必要な商品を必要な店舗に届けること。その仕組みがロジスティクス・システムであり、システムの核になっているのが物流拠点である。物流拠点設置の目的は、1) 時間通りに、どんな単位でも、指定した場所に届けるなどの顧客ニーズに応えること、2) ロジスティクス・コストを最小にすること(物流の6つの機能ごとの削減とトータルコストの削減)にある。

この仕組みのおかげで、PB商品も、NB商品同様に各店舗にスムーズに支障なく納品されている。しかしながらこのような仕組みを構築し維持できるのは大手・中堅スーパーと大手コンビニである。

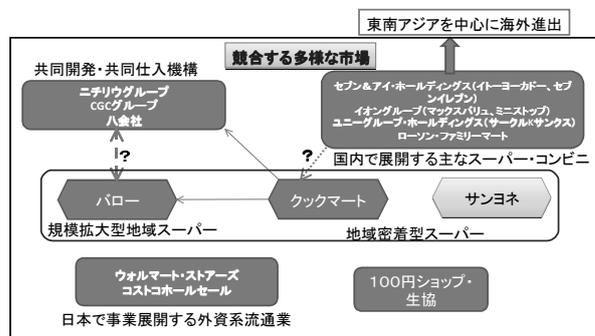
これに対して売上規模が小さく店舗数がそれほど多くなく規模の経済性が発揮できない地域密着型スーパーにおいてはこのような仕組みづくりよりも商品の品質と売上が重視する傾向が強い。

⑤ 地域スーパーの生き残り戦略

すでに述べたスーパー、コンビニによるPB競争時代の中で、東三河を中心にした地域スーパーの生き残り

りには、3つのパターンが存在する。その第1が中部圏を中心にさらに店舗拡大を図り、CGSグループのような共同開発・共同仕入れ開発型を目指す中堅スーパーバロー型、第2が地域密着型で、今後は、バロー方式の規模拡大を目指すか、大手スーパー・コンビニに吸収されるかのクックマート型、第3が地域拡大や店舗拡大ではなく、「食の安全と食の楽しさを大切にすること」をコンセプトにした地域密着型のサンヨネ型の3種類があることが判明した。

地域スーパーなどを巻き込んだPB競争時代の幕開け



プロジェクトではこの第3の地域密着型のサンヨネ型を取り上げ、その特徴を述べプロジェクトのまとめとする。

サンヨネが提供するハートマーク商品のコンセプトには、1) 食で地域に恩返しする(食へのこだわり、お客様から信頼される安心、安全な食品を提供する) 2) 「おいしい物、安心な物をできる限り提供していき、明るい家庭を作ってください」というメッセージを発信する規模拡大よりも、地域密着型スーパーを目指すことが上げられる。サンヨネの販売商品 に対する思いには、

- 1) 安心でおいしくて健康に値する食品の提供すること(サンヨネのコンセプトに共感する生産者などとの共同開発)、
- 2) 生産者の利益を確保する価格設定すること(生産者の立場に立った商品開発による価格設定)、
- 3) 顧客から販売人に「ありがとう」と言ってもらえるサンヨネの食文化を地域でかくりつすること、
- 4) 価値が高い商品として見てほしいこと(PB商と

いうより、お客様のことを考えたハートマーク商品の提供) などがあげられ、

これらを実現することが今後地域で生き残るための戦略である。

4. プロジェクト活動の教育効果

環境や時代の流れとともにこれまでの常識というのが変化していき、一つの考えやその時の状況だけでは全ては分からないということを感じました。また、調査の中でヒアリングだけでなく、各店舗に行って調査をすることの難しさなどを理解させることができた。

調査結果をまとめるにあたって、一人ひとりで担当したテーマを3枚のパワーポイントにまとめることによってそれぞれで理解してまとめた内容を報告する練習をしながら、チームが一丸となってやり遂げることの重要性を理解させることができた。

5. 指導上の工夫や困難性

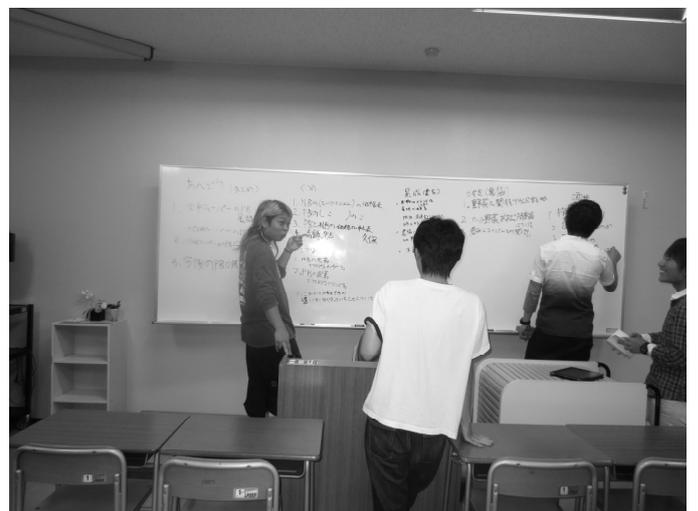
当初予定していた対象企業を中心に関連する事項を調査することにしていましたが、相手先の都合によりヒアリング調査しかできなかったため、学生の取組み意欲が減退してしまった。そこで、テーマの内容を、地域スーパーに広げ、結論を導くためには、各店舗およびPB商品を委託しているメーカーならびに農家・農協に対する実地調査に変更してもプロジェクトで取り組んでいる内容が大きく変更されたわけでないことを理解させた。

意欲の減退を回復させるために、複数のコンビニの店舗に担当を決め、PB商品とNB商品を買って味比べをすることにより、興味を持たせることにした。

その後本格的に、各自の調査内容および実地調査箇所の分担を決め、実態調査や相手先との連絡等を開始したが、各自の問題意識や意欲に差があり、なかなか全体を通して議論することが困難であった。

最終的には、すでに述べたように、各自の分担を最低3枚のパワーポイントに取りまとめさせ、各自2分間で報告する練習をし、テーマ全体の内容と結論をみ

なで共有することができた。



携帯端末向けアプリ作成

今井ゼミプロジェクト

1. プロジェクトメンバー

亀之内順也 (20923707)、水野翔太 (21023120)、
石川真次 (21023201)、壁谷竜輝 (21023712)、
勝見拓矢 (21123108)、田頭和也 (21123120)

2. 連携先企業・組織

プロジェクトにご協力いただいた連携先企業は、以下の通りである。

株式会社 SRA 名古屋事業所様
株式会社アイエスエル様
小坂井高校様

3. プロジェクトの概要

経営学部では全学年に iPad が無償貸与され、無線 LAN 環境を通して大学内どこからでもネットを利用することができる。電子教材配布だけでなく、レポート作成のための情報収集やゼミナールでのプレゼンテーション作成、就職活動などに利用されている。

本プロジェクトでは、本学の学生の携帯端末の活用を考え、アプリ制作や LMS の構築をテーマとした。アプリ作成を通じて開発技術を学ぶとともに LMS の構築を中心に学習ツールとしての効率的な活用を考える事を目標として活動した。

具体的には、アプリ制作にあたっては、本学の学生の利便性の改善を議論の中心とし、まず、本学のバス利用者向けにバス時刻表アプリを制作する事とした。また、並行して携帯端末活用の観点から、e ラーニングの実施に必要な学習管理システム (LMS : Learning Management System) の一つである Moodle を用いて小テストシステムを作成し、iPad との連携についての検証も行った。

アプリの制作方法や開発環境の検討にあたり、協力先企業様への見学やアドバイスを参考とした。株式会社 SRA 名古屋事業所様からは学校教学システムの概要と開発環境等を、株式会社アイエスエル様からは HTML, JavaScript, jQueryMobile 等による Web アプリ開発環境等について助言頂いた。実際の開発にあたって、

クラウド上にありブラウザ上で動作する Monaca という開発環境を使用した。

併せて、授業内での iPad 活用についての協力要請が小坂井高校様からあり、プロジェクト活動として対応した。要望は多岐にわたるが、今回は、体育における各グループの iPad によるビデオ撮影とそれらの無線 (Wi-Fi) 経由での教員 PC への提出システムの構築を行った。

アプリ制作やシステム構築を行う事を通して、チームによる活動の基礎を学び、各自の性格的な特性や技術的に不足する点等を自覚、内省できたと考えている。

4. プロジェクト活動の教育効果

社会人基礎力では、前に進む力、考える力、チームで働くことのできる力の3能力12分類の資質が取り上げられている。本プロジェクトでは、本プロジェクトでは、本学の学生の携帯端末の活用を考え、アプリ制作や LMS の構築という制約から、実際にはどのようなアプリを作るのか、どのようにチーム分けするのかあるいは分担するのか、開発を実行するかという活動がある事から、3能力すべてが求められる

本プロジェクトでは、作成するアプリの機能について集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論が必要になる。この段階では、考える力、チームで働くことのできる力が主に必要となる。スキル別、アプリ作成方法別にチーム分けしてからは、考える力、チームで働くことのできる力はもちろんであるが、さらに前に進む力が必須となる。協力企業との関係としては、情報提供、意見を貰うレベルから、外部である企業とのチーム作業までの発展が目標となる。

5. 指導上の工夫や困難性

本プロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる事とし、毎週のミーティング時間の調整と中間発表および成果発表等のスケジュール伝達以外は、特段の指導はせずにおいた。ただし、プロジェクト活動のための技術

的な質問等があった場合や必要機材・試験環境については出来る限り対応した。見学時の各種の配慮やプロジェクト進行上必要となるライセンス購入、開発したコンテンツの iOS Developer Program のアカウント名義等については相談に応じ、支障の無いよう心がけた。

初期段階の作成するアプリの機能についてはブレインストーミングや図形表現による意見集約法によって集約し、アプリ作成方法については学生個々のスキルや役割分担を含めての議論に時間をかけていた様子である。会議法については適宜ヒントを与えたが、この段階では、考える力、チームで働くことのできる力ともに様子がかがいがながら各自できていたように見えた。

初期の段階より、プロジェクト進行等も含めて学生に任せため、作業分担から始まって、個別作業、チーム作業のスケジュールまで、全ての段階で遅延等、色々あったようだが最終的にはチーム作業が出来ていた様子であったので学生の活動としては評価できると考えている。また、独自アプリケーション開発では2チームに分かれて作業していたが、それぞれのチームにおいて技術的な意味でも相応の学習効果もあったようである。

小坂井高校様からの授業内での iPad 活用の協力要請については、聞き取りした多岐にわたる要望から対応可能なモノへの絞り込み、高校生グループごとの iPad によるビデオ撮影とそれらの無線 (Wi-Fi) 経由での教員 PC への提出システムの構築を行った。限られた時間の中での要請に対して、柔軟に対応出来ていた点等も評価できると考えている。

以上の点については、学生の活動報告書や評価シートからも各自の達成度には違いがあるもののチームとしての活動はおよそ同様の前向きな評価をしているようである。一方、社会人基礎力における、計画力、実行力、チームで働く力 (学生は連携と表現) では各自反省点を挙げて内省している。これらの項目については、担当教員としては途中で何度か気づき思いはしたが各チームごと作業に追われているようであったので意見収集の場の設定を能動的にする事をしなかった。しかし、学生の活動報告から改めて振り返ってみると、担当教員として反省すべき点である。

対外的な評価については、協力企業からは学生の活動に対して一定の評価を頂けている様子であり、学生自身の印象も興味深いとの意見を頂いた。また、高校教員の方々からは感謝の言葉もいただいているのである程度評価している。対外的なスケジュール遅延等については、前に進む力に該当するが、対外的に迷惑をかける事はなかったもののまだまだ改善点が多く見受けられる。また、協力企業との関係としては、外部である企業とのチーム作業まで発展できれば理想的であるが、情報提供、意見を貰うレベルから脱していない。学生のアプリケーション開発に関する知識的技術的な問題でもあるので仕方がない面もあるが、指導教員として今後の課題としたい。

6. まとめ

プロジェクト活動は、社会人基礎力養成の教育プログラムである一方、学生の動機づけの機会と考えているが、できる限り外的要因でなく内的要因を誘発するものになるよう配慮したいと考えている。そのためできる限り教員の関与を意識させないようにしているつもりであるが、前節で反省点、課題としたように関与度合いについては私自身まだまだ考慮する点も多く常に悩ましい部分であると考えている。

本年度のプロジェクト活動を踏まえた次年度以降のプロジェクトの進め方について以下に示す。

(1) プロジェクト内容について
プロジェクト内容については、上記理由により特定することなく行いたいと考えている。

(2) プロジェクトの進め方について
同様にプロジェクト活動では、出来る限り学生に任せる方向で対応したい。教員の関与については議論の余地があり、今後も考慮しつつ運営したいと考える。

(3) プロジェクト運営の制度について
制度的なものについては特にないが、あえて言えば、3年次の学生の動機づけと達成できる目標には、学生個々の知識的な問題もあり、一考の余地があるように思う。2年から4年、各学生個々それぞれに実行可能なレベルがあるため、前後の導入的、実践的プロジェクト等があれば、さらに効果があるように考えられる。

SOZOショップコラボプロジェクト

川戸プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

松本教史(20923122),伊豫田英将(21123105)

浪崎祥平(21123125),廣中佑紀(21123127)

馬 駿(21123130),伊藤奨麻(21123205)

佐々木智至(21123216)

2. 連携先企業・組織

1)NPO 団体「パルク」

2)コラボ：ほの国百貨店

：松山小学校

3. プロジェクトの概要

1)4/26 開店の「笑輪」を発展させる

2)ほの国百貨店や松山小学校とコラボすることによって

1.現実の百貨店のマネジメントを体験する

2.笑輪のPR

3.地域の人との交流により、接客力が向上

3)その間に企業のマーケティング戦略に関する企業見学を実施。今回は中部国際空港株式会社で、同社のマーケティング戦略と空港見学を行った

※実際の活動～



4/26 SOZOショップ「笑輪」開店



6/21 中部国際空港会社見学



7/27 松山小学校夕涼み大会・出店



12/23 ほの国百貨店コラボ

「親子ふれあい広場」

4. プロジェクト活動の教育効果

1)毎週金、土、日営業のSOZOショップの企画・運営を通じて、日々商品の売り上げ状況、顧客の動向等、ショップの営業・マーケティングの実地体験を蓄積する。

2)松山小学校、ほの国百貨店でイベントを開催するに関して、イベント・セールスの企画、及び仕込み、当日のイベント進行、そして予想できない事態に対する対応や、現場での即効性のある取り組みや後始末等を臨機応変に、かつ、コラボ先の関係者、事業者に対して迷惑をかけずに実施することで、企画から現場までの一貫した事業遂行が体験できたことは、高い教育効果があったと確信できる

5. 指導上の工夫や困難性

1) SOZOショップ「笑輪」の運営は、4年生と3年生共同で当らせたが、3年生のモチベーションが全体として低く、ショップ出勤のローテーションを組んでも、開店後の第2週は3年生全員が欠席というスター

トだった。彼らにモチベーションを構築するのが難しかったが、少しずつ構築できてきた。とはいえ、まだまだ「店のためにできることをする」という気構えまでには至っていない。

2)工夫としては、「自分が動かないことでどれ程他の人に迷惑をかけるか」、「こんこんと」言い続けた。

3)困難性としては、教員がいろいろと「アドバイス」をすることを、学生たちが、「説教された」、「文句言われた」などと解釈する気風が抜け切れていないことである。そのための教育の仕方について、粘り強く、説得を繰り返すことを積み重ねる以外にない。

6. まとめ

1)いろいろと課題を残しながらも、本プロジェクトは、予想以上の成果をもたらした。何よりよかったのは、現場で学生たちが臨機応変に対応できたことである。別の言葉でいえば、「現場に強かった」ことを改めて学生も教員も認識できたことである。

2)当初は、コラボの内容やイベントの企画に少し物足りなさを感じられる面もあったが、それでも、そのイベントの顧客はどういう人たちで、そのために何をすべきかについて筋道を立てながら企画できたし、コラボ先からも支持されたことが成果である。

3)ただ、課題も見えた。

①コラボ先との連絡、交渉、日程確立などの仕事が十分任されなかったことが教員として悔やまれる。

内容に関しては、学生たちの企画を前面に追い出し、それがコラボ先から支持を得られたが、恐らく学生たちにももう少し詰められたのではという感があったと思われる

②一般企業や関係組織との連絡・折衝のほかに、企画を常に検証しながらより良いものに仕上げることを追求できるようになれることが、実社会でも必要となるので、ぜひこのことを意識しながら、あとの勉学を励んでほしい。

以 上

プロジェクトテーマ豊橋エコタウンプロジェクト

～豊橋市内小中学校に設置された太陽光発電システム状況調査～

見目プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

田辺俊希 (20923215)、鈴木涼太 (21123117)、
惣門健人 (21123118)、眞子 匠 (21123132)、
杉元篤史 (21123220)、鈴木啓吾 (21123221)、
中川千加 (21123228)

- ・各小中学校への調査協力のお礼 (お礼状の送付)
- ・調査情報のとりまとめと分析
- ・報告書の作成
- ・調査結果の報告 (豊橋市教育委員会)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋教育委員会教育政策課
(担当: 渡会小枝子)
- ・豊橋市市内各小中学校の校務主任

3. プロジェクトの概要

近年、資源の枯渇化、地球温暖化といったエネルギー・環境問題への対応から、太陽光発電の普及促進が進む中で、太陽光発電システムの故障や発電性能の劣化などの長期信頼性に関する問題が指摘されている。

太陽光発電の長期信頼性の評価には、ある地域において複数のシステムの長期的なデータ収集・分析が望まれる。しかしながら、民間施設に設置された太陽光発電のデータを長期的に収集することは困難である。一方で、公共施設に設置されたシステムについては、データの提供・収集が比較的容易であると思われる。

以上のことから、本プロジェクトでは豊橋市内の小中学校 (全 74 校) に設置されている太陽光発電システムを対象に、システムの稼働状況を調査し、その長期信頼性に関する基礎データを収集して分析する。

プロジェクトの実施にあたっては、以下のような作業を実施する。

- ・豊橋市教育委員会への調査実施の依頼
- ・各小中学校への調査実施の依頼
- ・訪問調査の担当校の分担決定
- ・訪問調査の日程調整 (電話で担当者と調整)
- ・調査項目の検討
- ・訪問調査の実施

本年度は 73 校の調査を行うとともに、過去 3 年間のシステムのトラブル状況を発電量への影響から 3 段階にレベル分けしてまとめた。その結果、本年度は 9 件のトラブルを確認し、その中には発電停止などシステムの運転への影響が極めて高いものが 7 件あった。また、昨年生じたトラブルが改善されていないものも 2 件確認した。

また、吉田方および豊城中学校を対象にして、太陽光発電システムの性能劣化評価を変換効率の推移から試みた。これまでに得られた結果の分析から、吉田方中学校のシステムについては変換効率の若干の低下が見られた。ただし、その低下の度合いは太陽電池メーカーの性能保証範囲内であり、大きな問題とはならないと思われる。今後、より詳細に定量的な分析を試みる予定である。

4. プロジェクト活動の教育効果

社会人基礎力 (前に踏み出す力、考え抜く力、チームで働く力) の育成に対して、本プロジェクトでは次のような教育効果を想定している。

(1) 前に踏み出す力

各自が調査分担校と日程調整を行い、訪問調査を実施することで、主体性・実行力を育成する。

(2) 考え抜く力

訪問調査の結果から、現状とその問題点を考察することで、課題発見力と創造力を育成する。

また、調査校の予定、各自の受講スケジュール、プロジェクトのスケジュールを念頭に入れて、効率的に訪問調査を実施しなければならない。このことから、計画力を育成する。

(3) チームで働く力

各小中学校の担当者によって太陽光発電システムに関する興味は大きく異なる。こうした状況で、調査の際に自分が何を聞きたいのかを相手にわかりやすく伝えることが必要である。ここでは、発信力が必要となる。また、相手の意見を丁寧に聞き出すことにより、傾聴力を育成する。

訪問調査の実施にあたっては、決められた日時に訪問することは絶対である。また、調査結果のとりまとめ、報告書の作成などグループでの作業には、やはり日時を決めて作業を協働で進める必要がある。こうした活動を通し、規律性が育成できる。

これまでに実際に自身で日程調整をし、また訪問を行うという行動をしたことがない学生にとって、これらの作業を行うことは非常に大きなストレスである。こうしたことから、ストレスコントロールが育成できる。

5. 指導上の工夫や困難性

プロジェクトを進める上で、プロジェクト実施の意義・価値、ならびに実施の効果や必要性を認識させることが重要である。そのため、春学期はエネルギー・環境問題、太陽光発電などの最新トピックを交えながら、基礎知識の修得に努めるとともに、ディスカッションを通してプロジェクトに対する意識を深める取り組みを行った。その結果、全員が「このプロジェクトは意義がある」との意識を持って活動に取り組むことができた。

本年度は7名と、これまでと比較して多人数でプロジェクトを実施した。そのために、一つの仕事を複数人で分担する場面が増えた。その際、グループによっては密に連絡を取り合って効果的に作業を進めるケースも見られたが、多くの場合は各自の責任が不明瞭になり、リーダー不在の中で目標とした期限内に作業を終えることができなかった。

作業毎にリーダーとなる人物が自発的に現れることを期待したが、特にプロジェクトの初期の段階では、作業分けをした段階でリーダーを決める(決めさせる)

などの指導も検討すべきかと考えている。

また、学生の理解力・スキルの違いから、特に報告書作成や発表資料の作成の際に、一部学生の負担が大きくなることも見受けられた。毎回の打合せの際に全メンバーがこれらスキルを身に付けられるように、議事録の作成、発表資料の作成などを課しているが、学生の自主性の差もあり、全メンバーに最低限目標とするレベルのスキルを修得させることは困難であった。この点については、上級学生の指導補助なども活用しながら対策を検討していきたい。

6. まとめ

本年度は、市内小中学校の全74校を訪問し調査を実施した。調査をやり遂げたこと自体から実行力の育成には効果があったと思われるが、目標とした期日を大幅に遅れたことを考えると、主体性、計画力の育成には課題を残したように思われる。

訪問調査によって計画していた情報収集についてはおおむねできており、こうした結果を見ると発信力・傾聴力の育成にもそれなりの寄与があったと思われる。また、訪問時の様々なプレッシャーを経験したことで、ストレスコントロールの育成も行えたと思われる。

しかしながら、基礎知識不足もあるものの、得られた情報分析は十分に行えていない。何が問題なのか、何を考えるべきなのかという課題発見力ならびに創造力をどのように育成するのかは、今後の大きな課題である。

アカウミガメ保護啓発活動

中野聡プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

内藤規文 (21123227)、白濱祥輝 (21123218)、
浅井昭宏 (21123201)、田中皓也 (21123222)、
石部広貴 (21123102)、佐々木勇太 (21123113)
高瀬竜也 (21123614)

2. 連携先企業・組織

ご協力いただいた、豊橋市役所環境部環境保全課
兵藤様、田中様に改めて謝意を表したい。

3. プロジェクトの概要

私たちは、日本の環境保護活動の一端を担うことを
試みた。特に、豊橋市の表浜海岸は、日本有数のアカ
ウミガメの上陸・産卵地であり、また豊橋市役所もウ
ミガメの保護活動に取り組んでいる。その保護活動理
念に賛同し、このプロジェクトの目的を、①保護活動
を通してウミガメの生態の理解を深め、②自らの保護
啓発活動を通して市の取り組みに協力することに定め
た。自主的保護啓発活動は、保護啓発リーフレットの
作成とサーフショップ、市内高校などでの配布、他県・
世界の保護の取り組みの調査に基づく報告書の作成、
映像作品の制作を中心に据えた。啓発活動を展開し、
市民のウミガメ保護に関する認知と理解を深めてもら
えれば幸いである。

4. プロジェクト活動の教育効果

環境問題は、現代資本主義経済が解決を求められる
基本課題のひとつである。2013年度には、東日本大震
災と原発事故の経験の風化が早くも始まった感がある
が、C.ロイドの「137億年の物語」のように生き物の
多様性を訴える著作も社会的関心を集めた。

このプロジェクト演習では、学生は直接的には、①
教室での学習を通してウミガメの生態と自然環境問題
を認識し、②豊橋市が主催するセミナーや夜間調査へ
の参加を通して環境的課題に対する取り組みとその困
難さを学び、③保護啓発活動のための資料(リーフレッ

トや動画)を自ら作成し(ムービーは1月末現在、なお
作成中)、④それらを用いた社会的働きかけを通して、
微力ながらも環境保護の努力に協力することを学んだ。

また、今期のプロジェクトは、プロジェクトリーダ
ーを中心に学生が進めたため、間接的にはチームとし
て協働することの楽しさと難しさ、適切な指導の難し
さなどを経験できたのではないかと。学部長賞とプロジ
ェクト賞の受賞も、個人的には必要以上に華美と感
じるが、学生の達成感を高める上で資するものがあ
った。

5. 指導上の工夫や困難性

社会科学系教員の視点からは、学生が取り組まな
かったことが、取り組んだことと同様に重要である。
①学生たちの短期間の試みは、地道な保護活動に遠
い。例えば、この地域の産卵数データは、複数の地
元自然保護団体のメンバーが、約13.5kmの表浜海
岸を4月末から11月上旬まで毎日、分担調査するこ
とによって得られている。学生は、こうした活動の
様子に数日間触れたに過ぎない。②次に、今回の試
みは、学習成果(根拠)と合理的思考に基づいて組
織的意思決定をする、アカデミックな素養と余り関
係しない。

例えば、アカウミガメは、絶滅危惧種IB類(EN)に
指定されているが、その原因は商品目的の乱獲、漁
業による混獲、ダムや防波堤による砂浜の浸食、海
岸の照明や騒音、捕食など多様である。こうした要
因と対策についての体系的考察は、ほとんどなかつ
た。ウミガメの生態と保護に関する論文や書籍は、
2000年以降の日本語文献だけでも優に100を越え
るが、HPには接したものの、皆、輪読した1、2冊
に触れたに過ぎない。

6. まとめ

学生には、プロジェクト演習を通して、組織や社
会の実際的課題について学び、そして考えて欲しい。
この点に鑑みれば、少なくとも一部プロジェクトは、
アカデミックなアプローチそのものを実践的に学
ぶ場として組織されることが望ましいと思う。(中野 聡)

『高校生と学ぶ会計学☆多』

野口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

井手 一希 (21123103)、斉藤 諒祐 (21123111)
曾越 崇史 (21123119)、糸数 隆佑 (21123206)
加藤 国靖 (21123212)、唐沢 龍介 (21123213)
中村 仁哉 (21123230、
担当教員 野口 倫央

2. 連携先企業・組織

- ・ 藤ノ花女子高校・朝倉丈徳様
- ・ 犬山高校(商業科)・山口正彦様

3. プロジェクトの概要

3-1 背景と目的

現代の企業人には、英語・パソコン・会計学の能力が必要不可欠である。この中で、英語・パソコンに関しては、義務教育の中において学習する機会に恵まれている。その一方で、会計学に関しては、大学入学後でなければ、学習する機会はないに等しい。

企業活動の主たる目的が利益獲得である。その利益の測定するのは、会計学固有の機能である。多くの者が企業に携わるにも関わらず、企業の目的に関する基礎的な考え方が欠如しているのは、社会全体から考えて、大きな損失であろう。

そこで、野口プロジェクトでは、高校生に会計学の学習の場を提供することを目的とし、活動を行った。具体的には、高校生に興味のあるオリエンタルランド(ディズニーリゾート)に焦点を当て、ディズニーの財務分析を行い、その結果の報告を通じて、会計学に関する情報を発信することで、高校教育に欠けている会計学に興味を抱き、その重要性に気付いてもらうことを目的として活動を行った。

3-2 実際内容と実施結果

野口プロジェクトは、図表1で示すようなかたちで、活動をすすめた。夏休み前までは、基本的には、会計学の基礎的な知識の修得に時間を費やした。

中間報告では、現状での成果報告に終始したが、あ

図表1 プロジェクト活動計画

月	活動内容
4月・5月	プロジェクトテーマの選定
5月～8月	財務会計・国際会計・経営分析に関する基礎知識の修得 → 伊藤邦雄(2012)『現代会計入門』日本経済新聞出版社の輪読を中心に
8月6日	中間報告会
9月～11月	ディズニーリゾートの財務分析の学習 → 有価証券報告書やアニュアル・レポートの分析を中心に
10月17日	藤ノ花女子高校でプレゼン
12月10日	犬山高校でのプレゼン
12月17日	成果報告会

る程度、基礎が身に付いたと思われる夏休み明け以降は、高校でのプレゼンに備えて、分析対象企業であるディズニーリゾートについて財務分析を繰り返した。

この成果を発揮すべく、10月には藤ノ花女子高校で「ディズニーの企業経営を見てみようー会計学の視点からー」というテーマでプレゼンを約400人の生徒の前で行った。さらに12月には、犬山高校で「ディズニーの財務分析をしてみよう」というテーマでプレゼンを行った。

前者は大勢の前でのプレゼンであり、学生にとっては大変有意義なものとなった。加えて、プレゼン後に朝倉様より、プレゼンに関する種々のご指摘を頂いた。この指摘は、犬山高校でのプレゼンに活かされた。

野口プロジェクトは、高校生に会計学について興味をもってもらうことを目的としたプロジェクトである。その効果の測定方法として、プロジェクトメンバーで検討した結果、アンケートをとることとした。アンケートでは、次の3点について、4段階(A評価:とてもそう思う、B評価:そう思う、C評価:あまりそう思わない、D評価:そう思わない)での評価を依頼した。

- ① プレゼンを聞き、会計学に興味をもったか
- ② プレゼンを聞き、会計学は将来の人生において役に立つと思ったか
- ③ プレゼンを聞き、会計学を学びたいと感じたか

アンケート結果は、図表2で示す通りである。ここ

図表2 アンケート調査結果

	有効 回答数	A 評価	B 評価	C 評価	D 評価
質問①	339 人	48 人	158 人	101 人	32 人
		14%	47%	30%	9%
質問②	339 人	119 人	179 人	31 人	101 人
		35%	53%	9%	3%
質問③	339 人	54 人	155 人	101 人	29 人
		16%	46%	30%	8%

(注) 藤ノ花女子高校の有効回答数 301 人、犬山高校の有効回答数 38 人

からも明らかであるように、概ね、高評価を得ることができた。質問①に関しては、61%の生徒から、プレゼンにより会計学に興味を感じたという回答を得られた。これは、野口プロジェクトの主たる目的が達成されたことを示唆する。

加えて、質問②および質問③に関しては、それぞれ、88%および62%の生徒が肯定的に捉えてくれた。会計学の有用性および必要性を多くの生徒に伝えることができた。これらのアンケート結果より、プロジェクト活動により、野口プロジェクトの目的を達成することができ、かつ非常に大きな成果が出たといえる。

4. プロジェクト活動の教育効果

野口プロジェクトは、高校生に会計学を教えることで、その知識の重要性を知ってもらうことを目的としたものであった。これを実現するためには、プロジェクトメンバーに十分な会計学の知識が備わっていることが必要である。さらに、その知識を、丁寧に分かりやすく説明する能力も必要となる。

したがって、このプロジェクト活動をやり遂げるには、プロジェクトメンバー自身の会計学の知識およびプレゼン能力の具備が不可欠であった。

そこで、高校生のアンケート結果が高評価であったこと踏まえると、プロジェクトメンバーもある程度会計学の知識を修得し、かつ、適切なプレゼンができたと考えることができる。したがって、このプロジェクト活動は、高い教育効果があったといえる。

5. 指導上の工夫や困難性

野口プロジェクトは、7名のゼミ生により活動が行われた。各ゼミ生が責任感を持ちながら活動に取り組める環境をつくることを、指導上最も重視した。なぜならば、今年度の野口ゼミの学生の過半数は成績劣後者であり、状況によっては、全く活動に参加しない可能性も懸念されたからである。そのため、前述した環境づくりが必要とされた。

そこで、そのような環境を作るために、作業の分担を計画的に、かつ徹底的に行った。その結果、成績劣後者も、自身に与えられた任務は最低限熟そうという姿勢が見られた。

一方で、一部の学生において、自身の任務以外には積極性に欠けた一面も見られた。このことは、指導教員の指導不足によるものと考えられる。

指導する上で困難に感じた点は、作業の負荷を如何に均等にするかという点である。チームで作業を行う場合、負荷が多くなってしまふ、いわば、頼りにされてしまふ学生が生まれてしまふことは、致し方のないことである。しかし、それが極端なものとなることは適切ではない。そこで、それを避けなければいけないと考えたが、様々な局面において、そのような事態が生じた。幸い、そのような学生の忍耐に助けられたが、このような点への対応は今後の課題である。

6. まとめ

プロジェクト活動の目的は、社会人基礎力の育成にある。その社会人基礎力は、前に踏み出す力、考え抜く力、およびチームで働く力の3本柱から成る。さらに、その3つの力は12の要素からなっている。どれか一つの力でも要素でも向上することを希望して、プロジェクト活動を見守ってきた。

プロジェクト活動を通して、ゼミ生全員が何れかの力あるいは要素が確実に伸びていると感じ取れた。3つの力のうち、野口ゼミに関して言えば、前に踏み出す力とチームで働く力は確実に伸びた。その一方で、考え抜く力に関しては、満足のいく成長を遂げていないと考えられる。

トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト

チームみよっキー (三好プロジェクト)

1. プロジェクトメンバー

小濱竜 (21123110)、 夏目祐樹 (21123124)、
森下広樹 (21123133)、 大里将太 (21123210)、
小田康晴 (21123211)、 董立平 (21123226)、
飛田知寿 (21023802)

2. 連携先企業・組織

- ・豊橋観光コンベンション協会 鈴木恵子様
- ・豊橋市(企画部 政策企画課) 鈴木裕二様
- ・豊橋市(産業部 観光振興課) 鈴木誠也様
- ・豊橋鉄道(鉄道部 運輸営業課) 織笠真至様
- ・穂の国とよはし芸術劇場PLAT 飯田幸司様
- ・豊橋生菓子組合事業委員会の皆様

3. プロジェクトの概要

豊橋市は、産業、観光、文化などを広く伝える様々なプロモーション活動に取り組んでいる。本プロジェクトにおいて、学生の目線でできるシティープロモーションとして、豊橋にある自慢できる施設やグルメ紹介に取り組んだ。「ここちよい街」をキーワードにしてテーマを「トヨハシ♡(ハート)ヨシプロジェクト」とした。プロジェクト活動を具体化するにあたって、「地産地消グルメ開発チーム」と「ゆるキャラプロモーションチーム」に分けて展開した。

地産地消グルメ開発チームは、豊橋生菓子組合の協力を得て若者に認知されていない豊橋スイーツの紹介を「豊橋ボーイズ&ガールズコレクションマップ作成」というサブテーマにして実施した。豊橋生菓子組合へ企画提案し組合協力の下、和菓子、洋菓子、歴史文化関連菓子などのスイーツコレクションの調査および試食会を実施した。特長あるスイーツをマップにまとめることにより、若者への豊橋スイーツについての認識を深める活動に尽力した。

ゆるキャラプロモーションチームは、豊橋のキャラクターであるトヨッキーを同伴して豊橋の誇れる施設を取材し、それをYouTubeでビデオ紹介した。全国的にも希少な路面電車およびそのサマー子供企画、豊川で

表1 トヨハシ♡ヨシプロジェクトの活動内容

地産地消グルメ開発チーム		ゆるキャラプロモーションチーム	
日付	実施事項	日付	実施事項
5月16日	豊橋市企画調整課鈴木裕二氏よりシティープロモーションに関するヒヤリング・相談		
8月1日	市内洋菓子店にヒヤリング	7月19日	豊橋鉄道㈱営業企画課へ協力依頼
8月23日	豊橋観光コンベンション協会へのヒヤリング・相談	8月8日	豊橋鉄道㈱子供向けイベント取材
10月4日	市内和菓子店にヒヤリング	10月23日	シティープロモーションビデオvol.1をYouTubeにアップ
10月15日	豊橋生菓子組合への企画提案	11月9日	豊川B1グランプリ取材
10月18日	豊橋観光コンベンション協会へのヒヤリング・相談	11月28日	豊橋芸術劇場PLATへの協力依頼
11月26日	豊橋生菓子組合との協議1	12月3日	シティープロモーションビデオvol.2をYouTubeにアップ
12月	1月実施予定の試食会準備	12月10日	シティープロモーションビデオvol.3をYouTubeにアップ
1月16日	スイーツ試食会開催	12月12日	豊橋芸術劇場PLATビデオ取材
2月	セレクションスイーツマップ作成配布	12月20日	宮川彬良主催歌劇のリハール取材(予定)
3月	利用者の集計、まとめ	1月	取材ビデオの編集・アップロードとTwitterによる周知

※ビデオ公開をTwitterで拡散の努力を継続

開催されたB1 グランプリ、最近オープンしたばかりの豊橋芸術劇場 PLAT の取材を行いビデオ作成した。作成したビデオは、YouTube (<http://www.youtube.com/channel/UCxw05emVLHyT6CzXFfiGbzA>) へ動画を公開した。

4. プロジェクト活動の教育効果

本プロジェクトでは、2つのサブテーマを設けて活動したので、協力企業も多く学生が直接企業人とコンタクト取る機会が多く設定できた。プロジェクトにおける外部との交流を表1にまとめる。これ以外にも状況説明や質問などをメールや電話で繰り返しおこなっており、このような活動を通して、学生はコミュニケーションの方法を思考する機会を多く経験出来た。また、ミーティング資料を学生が準備して企業の方々のミーティングを10回以上開催しており、文書要約力や説明力の訓練にもなった。

プロジェクト活動では、社会人基礎力3能力12要素に対する評価を行い学生にフィードバックすることになっている。プロジェクト活動中間地点9月とプロジェクト活動終了後の1月の2回実施することになっている。その評価結果の集計結果として各項目のメンバー平均を表2に示す。表2は、2回の評価値の平均を集約し、その差を示している。教員の評価では、一

表2 社会人基礎カシートによる評価値の平均

	1回目			2回目			差分			合計の差
	本人	教員	メンバ平均	本人	教員	メンバ平均	本人	教員	メンバ平均	
全体平均										
主体性	1.8	1.8	2.1	2.0	2.5	2.3	0.2	0.7	0.2	1
働きかけ力	2.0	2.0	2.5	1.8	2.3	2.4	-0.2	0.3	-0.1	0
実行力	1.7	1.7	2.4	1.7	2.0	2.2	0.0	0.3	-0.2	0
課題発見力	2.3	1.8	2.3	1.5	2.2	2.1	-0.8	0.3	-0.2	-1
計画力	1.8	1.3	2.3	2.3	2.0	2.2	0.5	0.7	-0.1	1
創造力	2.0	1.7	2.2	1.7	1.5	2.1	-0.3	-0.2	-0.1	-1
発信力	2.2	1.8	2.5	1.8	2.0	2.1	-0.3	0.2	-0.4	-1
傾聴力	2.2	2.2	2.5	2.2	1.8	2.1	0.0	-0.3	-0.4	-1
柔軟性	1.8	2.0	2.4	2.0	1.7	2.3	0.2	-0.3	-0.1	-0
状況把握力	2.3	2.2	2.5	1.7	2.3	2.4	-0.7	0.2	-0.1	-1
規律性	2.0	2.0	2.5	1.8	2.0	2.4	-0.2	0.0	-0.2	-0
ストレスコントロール力	2.5	2.0	2.8	2.7	2.0	2.4	0.2	0.0	-0.4	-0
前に踏み出す力	0.6	0.6	0.8	0.6	0.8	0.8	0.0	0.1	-0.0	0
考え抜く力	0.7	0.5	0.8	0.6	0.6	0.7	-0.1	0.1	-0.0	-0
チームで働く力	0.7	0.7	0.8	0.7	0.7	0.8	-0.0	-0.0	-0.1	-0

部を除いて上昇傾向を示している（表2および図2参照）。メンバー間の評価や自己評価においては、ほとんどの評価項目に関して、プロジェクト終了後の評価の方が小さく、評価が下がっている（表2および図1参照）。対外活動を継続して行っているなど活動実績があるにも関わらず、メンバー間の評価が低下している（表2および図3参照）。教員の評価からみるとプロジェクト活動により、参加学生の社会人基礎力は向上していると評価できる。一方、学生の自己評価並びに学生相互評価においては、表面上各能力において退化したように見える。プロジェクト活動の終盤においては、実作業を伴う活動が増加し、社会人基礎力を意識する機会が増加する。また、一定の行動力や実践力がないと実作業を予定通り進めることが難しい。そのため、みずから求める能力水準が向上する傾向になる。そのため、自己評価や他者評価においての達成レベルが相対的に低く評価された結果になりやすい。実際、本プロジェクトでは、2チームとも協力企業の方々の意見聴取やその意見に基づく行動が求められており、それに対して良好に対処できなかつたことが何度があった。そのため、中間評価よりも厳しく評価された結果であると推察される。

5. 指導上の工夫や困難性

5.1 指導上の目標

プロジェクト活動の指導において、教育成果を高めるために

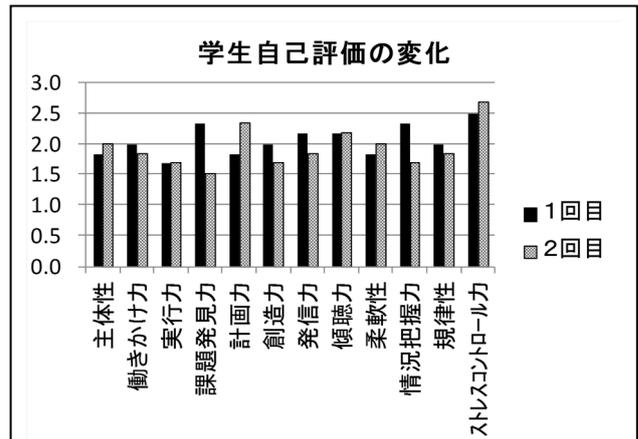


図1 2回実施した社会人基礎力に関する学生自己評価の比較

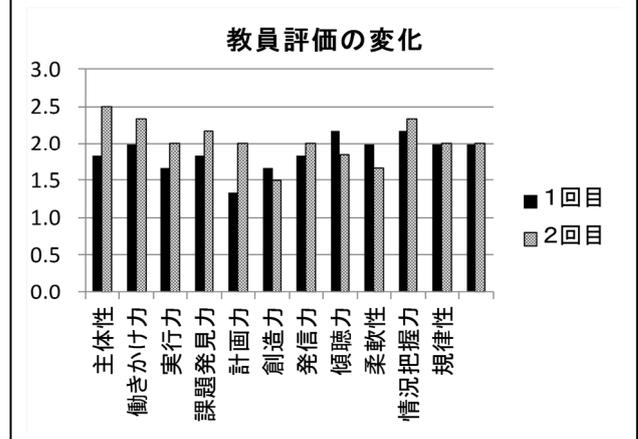


図2 2回実施した社会人基礎力に関する教員評価の比較

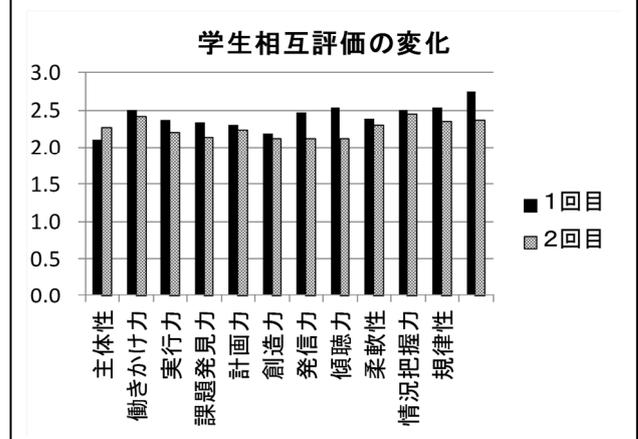


図3 2回実施した社会人基礎力に関する学生相互評価の比較

- 学生の活動量を多くする

・学生が自ら計画し自ら活動することを意識して指導している。

5.2 指導上の工夫

この観点を目標にして本年度は、以下に工夫を行った事項を箇条書きでまとめる。

(1) 学生の活動量を増加させ、自ら対処すべき機会を多く設けるために、テーマをサブテーマに分けてチーム構成を行った。このことによりそれぞれのチームのメンバーが対応すべき事項がおおくなり、それぞれのメンバーは、何らかの役割をはたさなければならない環境にした。

(2) 各チームメンバーの意思疎通やプロジェクト全体の意思疎通を良好にするため、情報の共有化出来る環境を形成した。具体的には、ミーティング最初には全体ミーティングをおこない、それぞれのチームの進捗報告を行った。

(3) 情報共有出来る環境形成のために google のファイル共有 (google drive) を利用してファイル共有を行った。また、プロジェクト用のメーリングリストを作成し、メールの内容を全体で共有化した。

(4) 学外への情報公開として、google サイトや YouTube などの CGM (Customer Generated Media) を利用した。

(5) 学生の主体性に対する意識向上のために、だれた何をするべきかについて常に問いかけを行った。

本年度の活動において、以上の工夫を行いながらプロジェクト活動を推進した。特に、2チームに分離したことにより、学生に対する負荷は、例年よりかなり大きくなった。そのような状況であったが、メンバーのほとんどが自覚を持って活動していたこととメンバー間の意思疎通が良好であったことから、プロジェクト計画のおおよそが実行できている。すなわち、所属学生の対処力が基本的な水準であったことによって、プロジェクトが遂行できたと思われる。

6. まとめ

本プロジェクトとは、学生目線でシティープロモーションを実施することを目的に、2つのサブテーマを設けて、活動に取り組んだ。2つのテーマに分化することにより、学生が主体的に取り組める学習環境を形成した。また、活動の効率化、学生のモチベーション維持など指導の工夫を行うことにより、学生の諸能力育成により効果があるプロジェクト活動を実践できた。

We ♥ NONHOI

～のんほいパーク盛り上げ隊～

三輪・山口プロジェクト

1. プロジェクトメンバー

味岡 美沙(21123101), 加藤 綾乃(21123109),
藤田 諭実(21123128), 辻井 友絵(21123225),
長坂 良恵(21123229), 村上 雄也(21123232),
沼倉由香理(21123624), 近藤 智基(21123215),
水藤 圭祐(21123219)

2. 連携先企業・組織

- (1) 豊橋総合動植物公園 (愛称: のんほいパーク)
- (2) 公益財団法人 豊橋みどりの協会
- (3) 豊橋市役所企画部シティプロモーション推進室
- (4) NPO 法人 ワライフ

3. プロジェクトの概要

本プロジェクトは昨年度からの継続テーマとして、豊橋総合動植物公園 (愛称: のんほいパーク) について様々な情報を発信し、活性化を図る目的で活動を行った。昨年度の課題であった情報拡散について改善を図るため、本年度は SNS (Social Networking Service) を活用すると共に、学内を中心として学生に向けた印刷物による情報発信にも取り組んだ。

プロジェクト期間を通じた恒常的な活動は、以下の通りである。

- (1) Facebook … 春学期は毎日、秋学期は週に1,2 回程度の頻度で、写真および動画を用いて園内の様子やイベント情報を紹介。
<https://www.facebook.com/Project.NonHoi>
- (2) Twitter … のんほいパークや動物園に関する情報を発信しているアカウントを積極的にフォローすると共に、活動の様子などを発信。
<https://twitter.com/ProjectNonhoi>
- (3) YouTube … Facebook 上で動画に対する反応が良かったため、取材等を通して録画した動物の動画を編集して公開。
<http://www.youtube.com/channel/UCOg8DMO OQOB6VBhSKEzQlbQ>

- (4) 三角柱 POP … 長期休業期間を除いて毎月作成し、学内複数個所に設置。

その他の活動としては、以下のようなものがある。

- ・ ナイトガーデン (8/13～18) について市内大学向けに広報、および、期間中のイベント協力。
- ・ 学園祭 (10/26,27) におけるアンケートの実施。
- ・ シルバー向けフリーマガジン「ワライフ」への記事掲載。

なお、情報の発信源はのんほいパーク、受信者は一般市民であり、我々はその間で情報の仲立ちをする立場である。間違った情報や、パークにとって不本意な情報を流したりしないよう、取材による情報収集を心がけた。また、SNS での言葉づかい等にも注意し、制作物については随時パーク側に確認してもらう等、細心の注意をはらって活動を行った。

具体的な実施スケジュールを表1に示す。

表1 プロジェクト実施スケジュール

月/日	活動内容
5/23	Facebook 稼働開始 Twitter 稼働開始
/30	協力依頼 … のんほいパーク
6/21	協力依頼 … 豊橋みどりの協会
/27	意見交換 … 市役所企画部シティプロモーション推進室
7/3	取 材 … 植物園七夕イベント
/6	参 加 … 行財政改革プラン公開プレゼンテーション
/12	取 材 … 暑さ対策 (フグミスト)
/21	掲 示 … 創造大学 (三角柱 POP)
/24	掲示依頼 … 愛知大学 (ポスター、フルーツ)
/26	掲示依頼 … 豊橋技術科学大学 (〃)
8/13～18	参 加 … ナイトガーデン
9/27	依 頼 … 学園祭協力依頼
10/8	掲 示 … 創造大学 (三角柱 POP)
10/17	取 材 … のんほいパーク内 打ち合せ … アンケート内容 チラシ・缶バッジ寄付
10/26・27	創 造 祭 … アンケート実施、学内展示
10/31	YouTube 稼働開始
11/7	掲 示 … 創造大学 (三角柱 POP)
11/21	打ち合せ … ワライフ
11/28	取 材 … トラ・ライオン
12/06	打ち合せ … のんほいパーク、みどりの協会
12/25	発 行 … ワライフ

4. プロジェクト活動の教育効果

4.1 社会人基礎力の養成

社会人基礎力における3能力12分類の資質について、本プロジェクトにおける体験項目を表2に示す。

本プロジェクトでは、昨年度の課題である効果的な情報拡散に取り組むことから、全体を通して『考え抜く力——特に“課題発見力”』や『前に踏み出す力——特に“実行力”』が必要になると考えられる。また、SNSを用いて継続的に情報を発信することから『前に踏み出す力——“主体性”』や『考え抜く力——“計画力”、“創造力”』が重要となる。

さらに、印刷物の制作は、各学生の技術力に依存する部分が多く、コンテンツの具体化・実現に向けては、『チームで働く力——“状況把握力”、“規律性”』、『前に踏み出す力——“主体性”』が必要である。

プロジェクト期間における社会人基礎力評価（学生自己評価）の推移について、図1に示す。

図1の結果から、規律性や傾聴力、主体性、等について自己の評価が上がっていることがわかる。これは、チーム内で役割を分担し、計画的に情報発信を行うことで、学生自身が成長を自覚できた成果だと考えられる。一方で、創造性、発信力、等が低下しているが、活動の状況や個人面談の様子からは「自分の能力が低い」という悲観的なものではなく、「もっとうまくやりたい（が、できなかった）」という反省の気持ちが表れたものだと感じた。

表2 プロジェクトにおける体験項目

3つの能力	12の能力要素	プロジェクト実施に必要な能力
前に踏み出す力	主体性	◎物事に進んで取り組む
	働きかけ力	○
	実行力	◎目標を設定し実現する
考えぬく力	課題発見力	◎現状分析/改善案の検討
	計画力	◎具体的な計画立案
	創造力	◎魅力的な記事の作成
チームで働く力	発信力	◎取材、インタビュー
	傾聴力	◎取材、インタビュー
	柔軟性	○
	状況把握力	◎作業状況や役割分担の把握
	規律性	◎作業分担に責任を持つ
	ストレスコントロール	○

◎：大いに必要，○：必要

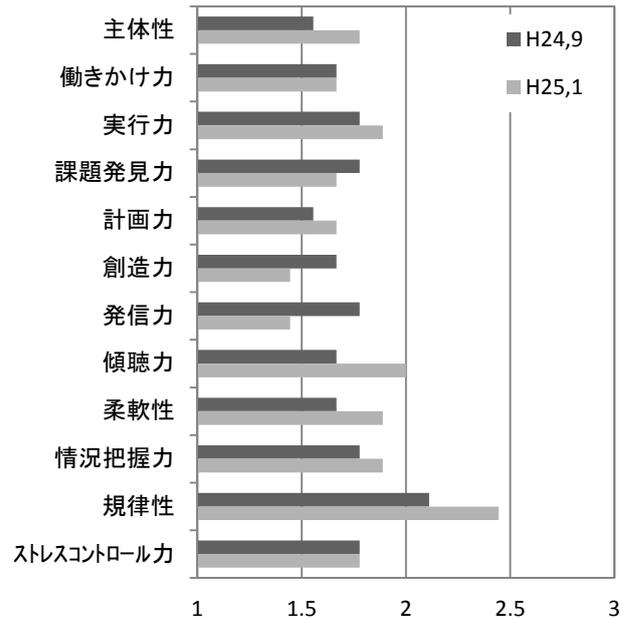


図1 社会人基礎力評価 (学生自己評価)

4.2 その他の教育効果

本プロジェクトでは、社会人基礎力の養成と併せて、

- (1) 自分に不足している知識・技術を見つめ直すことで、自己の発展の原動力とする。
 - (2) 大学で学んだ知識や技術を発揮できる“場”を設けることで、積極的な自己表現を促す。
- という2点を実現できるように全体像を計画した。

プロジェクト活動を通して学生の様子を観察すると、程度の差はあるものの、

- ・ SNSの仕組みやそれぞれの連携方法
- ・ ファン獲得のための効果的な記事の書き方
- ・ 印刷物を利用した情報の発信

等について基本的な知識を習得できたように思える。また、印刷物の作成に関しては、ソフトウェアの操作スキルを持つ学生が中心となり、成果物として十分な完成度のものを複数作成することができた。これらのことから、大学の“カリキュラムの具体的な成果”としての結果は十分に得られたと考えている。

5. 指導上の工夫や困難性

本プロジェクトでは、SNS の活用、動画の編集といった授業では扱わない内容が含まれていた。また、印刷物の作成にはグラフィックソフトウェアの操作スキルが不可欠である。このため、各種コンテンツの制作について学生の ICT スキルに依存する部分が多く、一部の学生に負荷が集中する場面が多く見られた。また、一部の学生が行っている作業について、他のメンバーの関心が薄く、作業状況を全体で把握できていない場面に何度か遭遇した。この点に関しては、教員主導でミーティングを進めたり、進捗報告を報告・記録させたりすることで改善を図ったが、円滑な進め方については今後の検討課題としたい。

また、学生の作業分担の捉え方（責任感）に差があり、SNS の更新を忘れたり、手抜き（のように見える）記事を書いたり、といった場面が何度か見られたのは非常に残念だった。さらに、一部の学生が自己都合（アルバイト、家庭の事情）を優先することに対して、他の学生から不満の声が挙がることがあった。必修授業であり、外部との接触が多いという性質上、どうしても教員主導になる場面が多くなるため、学生から“やらされている感”を払拭するのは困難である。作業の分担に教員が手を加えたり、各学生に個別に声を掛けたりすることで、不公平感を無くし、学生の自発的な行動、責任感のある行動を促すような仕掛けが必要だと感じた。

女子学生が多いチームであり、雑談の際には非常に活発な意見交換がなされ、柔軟な意見が出されていることが多かったが、「今から議論せよ」と指示を出した途端に黙ってしまう学生が多かった。また、男子学生との情報交換がほとんどできておらず、教員が口を挟むことが多かったことは大きな反省点である。取材やインタビューだけでなく、メンバー内での意見交換を通して「発信力」や「傾聴力」を養うことができるよう、指導を改善したい。

6. まとめ

2年目の活動ということで、主な連携先であるのんほいパーク、および、豊橋みどりの協会からは昨年度以上の協力を頂くことができた。特に、今年度はメール等を通してパーク側から情報を提供して頂くことができたため、非常に円滑に活動を進めることができた。また、学生からの一方的な活動ではなく、パーク側からの依頼や提案等を受けることもでき、活動を行う上で学生が「やりがい」や「責任感」を持って作業を進めている場面が多く見られた。外部協力を得て進めるプロジェクトでは、信頼関係の構築が非常に重要であると考えている。その意味では、本プロジェクトは十分に成果を出せたと考えている。

なお、社会人基礎力の養成については、チーム全体を通して見ると、計画性や実行力について大きく成長を感じることもできた。一方で、プロジェクト開始時点での個人差が最後まで継続する点については、何らかの改善案を検討する必要があると考えている。特に、責任感や規律性といった“家庭のしつけ”から派生するような部分については、各学生の行動心理が異なっており、全員が同じ水準を満たすことは困難であると強く感じている。

